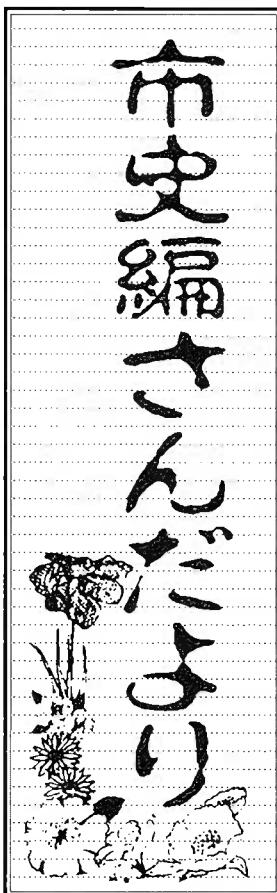


(朱筆) 〔壹番〕	(付札)「仙助組」	(付札)「山本善四郎組」	式番 〔同人〕	三番 〔兼勤組〕	四番 〔長兵衛組〕	五番 〔付札〕「長平組」	六番 〔付札〕「富田嘉次郎組」	六番 〔付札〕「茂右衛門組」
--------------	-----------	--------------	------------	-------------	--------------	-----------------	--------------------	-------------------

史料(1)

西唐人町の見図帳

近世専門部会
林 田 廣



発行日
1998(平成10)年11月30日
編集・発行
熊本市
新熊本市史編纂委員会
熊本市手取本町1-1
市史編纂課
☎328-2038・2903

目 次

- ▽ 西唐人町の見図帳 1
- ▽ 「通史編第一巻自然・原始・古代の自然編」の刊行に当たって 3
- ▽ 「通史編第一巻自然・原始・古代の原始・古代」一編集にあたって 4
- ▽ 「通史編第二巻中世」を刊行して 5
- ▽ 「史料編第五巻近世Ⅲ」の刊行にあたり 6
- ▽ 「通史編第一巻自然・原始・古代」 5
- ▽ 「通史編第一巻自然・原始・古代」 5
- 付図の植生図について 7
- ▽ 日誌抄 8
- ▽ 熊本市岫雲院の木造如意輪觀音坐像と猪熊仏師について 9
- ▽ 史料調査に御協力いただいた方々 11
- ▽ 編集後記 12

「新熊本市史 史料編第四巻 近世Ⅱ」に収録されている。

史料(1)は見図帳の最初の部分にあり、六組の五人組とその組親の名前が記されている。組每の屋敷数は一定しておらず、その組み合せ方は、一番組は屋敷番号の一番から九番まで、二番組は一〇番から一四番までといった具合で、隣伍の組み合わせとなっている。史料(1)に統いて一番から三四番までの居屋敷と住人の記事があり、その記載要領は史料(2)のようになつてている。「北側」とは西唐人町通りの北側という意味である。見図帳にはこ

と居住者については当主の職業・役職・特権などが記されると同時に家族構成やその後の移動などが詳細に記録されている。

居住者については当主の職業・役職・特権などが記されると同時に家族構成やその後の移動などが詳細に記録されている。

九番 北側	一表口三間入九間 出商壳	御掃除方御地子 都合拾六間入	此坪式拾七坪 此裏尻二七間	(朱筆) 「壱番組」
元治元年子五月家内共二町並之影	家内影踏御免	此坪式拾壹坪	此裏尻二七間	
踏御免被仰付候	薩摩屋	都合拾六間入	此坪式拾七坪	
文久二年戊六月病死仕候	又吉	九番	九番	
同年七月病死仕候	養子	西五十三歳	北側	
文久三年亥正月古鍛冶屋町代物屋 太市妹を縁組仕候、慶応四年辰五 月離縁仕候	同人娘 まち 成式歳	同三十歳	九番 北側	
元治元年子九月出生仕候、同二年 丑四月呉服武丁目人數代物屋太市 跡目二養子二罷越候付、同所へ 送り手形遣申候	同人後妻 かの 亥二十二歳	(付札)「栄吉」 栄助妻 あさ 同式十四歳	都合拾六間入	
慶応二年寅十二月出生仕候	同人二男 栄次郎 卯二歳	後妻 さか 巳二十三歳	九番 北側	
慶応四年辰九月古鍛冶屋町柏屋清 右衛門姪を縁組仕候				

史 料 (2)

一、「酉〇〇歳」と記されている者（又吉・栄助・あさ）は、この見図帳が作成提出された文久元年一月現在の住人である。

二、「酉以外〇〇歳」の者は文久元年一月以後の出生か、又は同年三月以降の縁組によつて家族の一員となつた者であり、当人が見図帳に記載された年とその時の年齢を記したものである。

三、出生については生存者（まち・栄太郎・栄次郎）のみを翌年の二月付で二歳と記帳している。

四、縁組による転入（かの・さか）の場合は、

一・二月転入については見図帳の提出期限に間に合えばその年付で記帳するが、それ以外はすべて翌年付となる。

五、死亡や転出の場合はその理由を注記して名前を朱消しする。（『新熊本市史 史料編 第四卷』では朱消しは省略してある。）

見図帳の後半部には「懸人數」として、史料(2)の家族欄と同じ要領で二七家族が記載されている。懸人數とは送り状などの手続未済のために転移先の町村の人数に加入できな

いでいる者」「以前之支配方持懸り他町へ居住いたし居候もの」（『熊本藩町政史料』）のことである。従つてこれらの家族については西唐人町の方でその動静を把握し、諸御達筋なども伝えなければならなかつた。尚、見図帳の最後の部分には毎年二月付で「右之通見帳調方仕御達申上候」とあるので、毎年二月には見図帳を訂正して町奉行所へ提出していくことがわかる。

見図帳作成の始期や記載内容の変遷などについては判らないが、西唐人町のこの見図帳は屋敷台帳であると同時に戸籍簿・住民台帳でもあり、西唐人町支配の人数を把握する基本的な帳簿であった。



『通史編第一巻自然・原始・古代の自然編』の刊行に当たつて

自然専門部会

岩本政教

自然部会の発足は、東西冷戦のベルリンの壁が破れた一九八九年の暮れで、爾来八年六ヶ月の月日を費し、九八年六月刊行の運びに至つた。発足後間もなく、篤学好漢の士、浜田専門（植物）委員が膨大な資料を集めながら、不慮の死を遂げられた事は誠に残念であつた。

熊本の自然の内容は多彩で多岐に亘つているが、ここでは位置・気候・地形・地質・水・植物・動物の順に記述している。はじめに東アジアに近い西南日本九州の中央的位置を占める県都熊本市の数理的及び関係（人文）位置の意義をグローバルな視点から述べ、気象・

気候に関しては、市の北部京町台地にある熊本気象台の一世紀に及ぶ観測データーを基準として、熊本市の内陸的気候の特性、ついでメッシュ気候値による気候図表を基に市域内の気温と降水量から、金峰山の山岳部と平野部の地域性を浮き彫りにし、更に隣接するアメダス地点や県内各地との比較がなされ、梅雨期に多い大雨・台風・干ばつなどの気象災

害を述べている。

市域に展開する多彩な地形はどのような過程を経て形成され、またその地質構造はどうなつてゐるか、多くの写真、図表を駆使して見事に説明している。また有明海（島原湾）の海面の変化についても記している。

なお立田山断層と熊本地震や金峰火山噴火の可能性についての記述は注目に値する。

水については、加藤清正以来の河道の変遷、

改修事業を歴史地図、写真を交えながら説明、市内河川のBOD（生物化学的酸素要求量）

の経年変化、貯水タンクの阿蘇、金峰両火山を控えた熊本市の豊かな地下水の流動系、帶水層、水質等について詳述し、主な湧水の由来及び現況、湧水量の変化を興味深く述べ、模式図で湧出機構を明らかにしている。

航空写真と足で書かれた特色ある「熊本市域現存植生図」は配色の難点を記号で補い、その成果を十分果たしている。

また地域別に植生と植物相にふれ、里山やドングリの話は面白く、四季の草花、街路樹の記載は興味をそそる。立田山の高木、亜高木、低木、草本を立体的に描いたシイ・カシ及びクヌギ・コナラの林相図、江津湖水生植物の植相図は自然観察に有効である。

動物は多くの写真を掲げ、山地、丘陵、江津湖、市街地、汽水、湧水域に生息する哺乳

類、鳥類、魚類、両生類、爬虫類、昆虫類、クモ類、陸産貝類、淡水産貝類等の現況から、それらが都市化や水質変化に伴う生息環境の変化の影響をどのように受けつ、あるかを追求し、外来種や未だ自然環境の残つてゐる市域に貴重種が残存していることを述べている。

これを要するに、豊かな緑と水に恵まれた熊本市は香り高い健康と文化の町づくりにふさわしい都市といえよう。



成道寺境内の湧水

『通史編第一巻自然・原始・古代の原始・古代』 一編集にあたつてー

原始古代専門部会

田邊哲夫

最近における考古学研究の進展がすさまじいのは新聞紙上などでご承知のとおりである。

それは文化財保護法によつて埋蔵文化財の発掘調査が全国的におびただしい数、実施されているからで、それも広い範囲を総めくりに発掘しているから、確実なデーターとなつていて、説得力が増している。さらに、各分野の科学者との共同研究によつて視野がひろがつてきている。熊本でもこの傾向は変わらない。今回の通史編は七〇〇ページを超える大冊となつて、熊本での原始古代の概説書としては最高の分量を記述することができた。

旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代などの考古学の分野、大化革新から奈良・平安前期までの文献史学の分野を、最前線の研究者の分担執筆としたことから、新しい知見が随所に溢れ、内容的に

も自信がもてるものになつた。

ことに、史料編第一巻として「考古資料」一三五〇ページ

を平成七年度に刊行でき、各遺跡ごとに

紹介するというユニークな作業ができた後だから、通史編では個々の遺跡については簡略化することができ、通

史としてはすつきりしたものになつたと考えている。研究者には通史編・資料編を併用して活用いただきたい。

ただ、学界に新知見が続々登場している現況から考えると、この後二〇年も経たないうちに、大幅な改訂を要するようになるであろう。ほかの分野もそうかも知れないが、考古学の分野では一層その感が強い。それから県内の市町村史の最近の傾向をみると、金石文の分野ではよく別冊を出している。それも中世の五輪塔や板碑だけでなく、近世の墓碑や近代の記念碑まで収録している。熊本市内には細川藩主の墓碑など歴史の貴重な証言になるものが多い。それが急速に姿を消しつつある現況では、熊本市でも緊急に取り組まねばならない問題だといえよう。

また、古代史については、議論百出の様相



があるが、市史としては取り上げにくい点も多く、期待外れの向きも少なくないと推察するがご了承いただきたい。奈良・平安時代については、従来、熊本では詳細な記述が行われていなかつた。今回提出された原稿は大幅に予定の分量を超えていたので、思い切つた減量をお願いする羽目になつた。本当は書くことが一杯あつたのだ。部会長である私の認識不足で、割り当てページ数が適正を欠いたことをお詫びしたい。

ともあれ、今回ほど書けたことはなく、充実した画期的な内容とすることができた」とを喜んでいる。

『通史編第二卷 中世』 を刊行して

中世専門部会

工 藤 敬一

本巻は、一〇・一世紀の平安時代中期から、一六世紀の佐々成政の肥後入国にいたる

熊本地域（飽田・託麻の二郡）の歩みを一巻にまとめたものです。大まかな構成は以下の通りです。巻頭の一五頁の「概説」につづき、「第一編 中世前期の熊本」では、まず、平安中期以来の肥後の中心「飽田国府」（現二本木町）の実像を考え、その構成とともに景観についても仮説を提示しました。ついで菊池氏等の肥後武士団の成立から、平家の支配・内乱を経て鎌倉幕府の確立にいたる肥後の政治的・社会的情況の変化等を、最新の研究をふまえ叙述し



ています。

「第二編 中世後期の熊本」では、南北朝の内乱の展開および室町期の政情勢が、地域の有力勢力である河尻氏や託磨氏など中心に、いくつもの新見解を交えて、木目細かに叙述されています。そして戦国期の熊本の政治社会の実態が、主として大友氏の肥後支配と鹿子木氏や城氏など国人領主の存在形態の具体的な追究を通じて、新たな地域史的観点から明らかにされています。また本編には、はじめて中世の「隈本城論」がまとめて提示されたのも特筆すべきことです。

「第三編 中世熊本の社会と生活」では、まず中世地域でもっとも大きな存在であった神藏荘・鹿子木荘の地頭託磨氏を中心に、武士の族的構造と氏神祭祀の実態が、系図・譜の再検討を通して明らかにされ、ついで武士・地侍・百姓など諸階層の人々の居住形態や生活の実像が、地名や屋敷のあり方、神社祭礼の諸道具などを手がかりに描き出されて



います。この第三編は、全国的にみても類書（自治体史）に見られないユニークな内容となっています。

「第四編 中世熊本の宗教と文化」では市史編さんに伴う仏像調査の成果にたって、中世熊本の寺社と信仰のあり様が、トータルにまとめられています。金峰山系修験について、多くの遺跡・遺物を紹介しつつまとめられているのも注目されるところです。そして本編の最後には特論として、「桧垣伝説」「寒巖義尹と美術工芸」、「仏像と石造物」の三節がおかれています。

なお、巻末には一六ページの年表もつけられています。ほど以上の構成をもつ本書は、本文のみで九〇〇頁を超す大冊です。中核都市を含め市史レベルでこれだけの密度で「中世」を描き出したのは少ないのではないかと思います。私たちが執筆に当たりできるだけ多くの資料をまとめ、考究を重ねました。資料の全く乏しい分野もあります。そんな所では今後の検討のために思い切って新説、仮説を提示した場合もあります。

本書が広く市民の皆様に読まれ、私達の熊本市の豊かな歴史を再発見していただこうと願っています。

『史料編第五卷 近世Ⅲ』の 刊行にあたり

近世専門部会

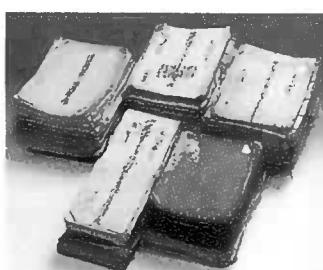
森山恒雄

本書は史料編の近世Ⅰ・Ⅱに続く第三冊目の史料集で、内容は江戸時代の熊本地域の農村と農民に関する史料を千頁にわたって網羅した史料集である。

史料は、市民には文章がむづかしく馴染みが薄いといわれる所以、本書では市民の人々の先代たちが、江戸時代にどんな農村のなかで、どんな生活をすることで社会を築かれたかという視点から、市民にもよりわかりやすい史料を採録することにした。また内容も豊富に農民・農村関係の史料を採録し、市民の方々の諸疑問にも答えることとした。しかも幸いなことに、市民の中に江戸時代の惣庄屋の史料が多量に保存されていて、これまで未公開・未公刊の、いわば一等級の史料でしたので、それらを十二分に活用させて頂き、実態をより明細にしました。その史料と、農政史料を多く蔵する永青文庫・熊本県立図書館の文書を博搜・検討して、数百点の史料をさらに精選して、本書千頁余を構成して基本史料とした。勿論、内容が豊富な文書は全冊を収載して農民生活の様態等をより多く知りうるようになつた。

内容は六章構成で、第一章は郡と手永とし、

飽田・託麻郡として、各村の公式の村高と、領内調査による実村高・人畜数・水夫船・舟数が判明する史料と、幕末期の状況は「手鑑」を収録した。ついで肥後で独特な制度の手永について、その機能と機構、および役人の任務内容を示した。さらに農地と水利では、江戸時代の土地所有の形態をみるため検地帳・戸名寄帳・地引合を例示するとともに、熊本地域の農業生産に関する白川・緑川の河川普請と水利の問題、新川普請造成、および有明海沿岸地域の干拓新田の史料を収録した。第二章では村と村役人の問題をとりあげ、村の人口構成、宗門改めの様子、五人組の御仕法書、有力農民の寸志献金と御家人・武士化の問題をとりあげた。第三章では農業と諸産業としての農業生産の諸様態と農業技術、品種改良、栽培方法、肥料と除害、農事行事の史料を採録するとともに、肥後藩の専売品となる養蚕と蠶蠅關係の史料と水前寺蠶締所の行事史料、御用窯の上野焼の生産と関係史料を多く収載した。



第四章では村の生活と農業経営を取りあげ、村の生活として、一般的に叙述される祭礼・信仰や娯楽・手遊びの関係史料は勿論のこと、家族慣習や分家・新家設立、奉公人の問題、さらに惣庄屋たちが農民生活について近隣手永と相談する千葉城会談の史料を収録したが、本史料は手永のもつ機能をも明らかにしうる史料である。また農業経営では、まず幕末期の反当の収入と支出の身代漬れの問題、展開する質地・上ヶ高・永代売渡しの状況、そして展開する地主・小作関係の様子と農民層の階層分化をとりあげ、封建社会の農村の崩れゆく姿を示した。また漁村関係で旧二町村の史料が幸いに発見され、全冊を収録した。第五章では、年貢と負担をとりあげ、年貢納入の様態、農民の負担する年貢のみならず、小物成・運上と諸夫役の内容と負担・支出、さらに御用銀の負担、炉方会所への運上銀、津口・陸口の運上銀問題まで含めて史料を収録した。第六章では災害と飢饉をとりあげて、享保の大飢饉、寛政四年の島原眉山崩壊の津波災害、坪井川洪水等の史料を収録するとともに、それらからの救済制の備荒・救恤と廻米・糧米拝借の史料を採録した。

これらの集録した史料は、本市史で初めて公開・公刊される史料であるし、また他の市史にはみられない豊富な史料集となつてゐるので、是非ともに利用して頂くよう切にお願いします。

『通史編第一巻自然・原始・古代』付図の植生図について

熊本学園大学付属高等学校教諭

佐藤千芳

新熊本市史通史第一巻自然・原始・古代編には付図として植生図が付けられた。その作成には、本文執筆以上の時間と労力がかけられている。植生図とは何かを解説しながら、一枚の図のもつ意味・意義を考えてみたい。



一、地域で異なる植生

ある地域に生育している植物集団（植物群落）の有り様を大まかにとらえて植生という。

それぞれの地域には、その地域の自然条件（降水量、気温、土壤など）人為的影響（伐採、野焼き、採草など）の総和として、その地域特有の植生が成立している。照葉樹林、植林（スギ、ヒノキなど）、草原、畠地、水辺の植物群落など、その姿は様々である。また、それが人為的影響下に成立したもの（代償植生）か人為的影響を受けずに成立したものの（自然植生）かによつても性質や構造が異なる。

ある地域の自然環境を知る上で、植物群落の広がりと質を把握することは必要不可欠な作業である。質は植生や成育する植物の構成（植物相）の調査によって把握され、広がりは植生図によつて把握される。

二、植生図から見えてくるもの

すなわち、私たちの周りには様々なタイプの植生が入り乱れて生育していくことになる。この様子を地図上に表したもののが植生図である。植生の入り組んだ分布の様子をことばで表現することは無理である。しかし、植生図では、どのような植生がどのくらい、どのよう分布するかを一目で見ることができる。



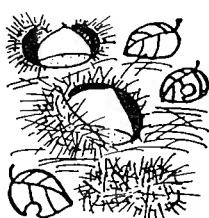
遷移途上の群落の構造・クヌギ・コナラ林

そこから、川や湖の近く、農業地域、都市部、山のすそ野部、斜面部、上部、斜面の向き、標高などの違いによって種類や量、分布の仕方に特徴があることが見えてくる。さらに、自然環境と人為的影響の関わり合いの結果として地域の植生分布が形成されていることが見えてくる。

三、植生の変化 II 遷移

ある地域に見られる植生は、時間とともに変化する（遷移）。遷移は、その地域の自然環境にもつとも適した状態（極相）になって安定する。熊本市のほとんどの地域で、それはスダジイやカシ類を中心とした高さ十五メートル程度の照葉樹の森（照葉樹林）である。現在、そのような森は立田山などごく限られた地域にわずかに見られるだけである。

現在、熊本市で見ることのできる植生（現存植生）のほとんどは代償植生であり、このまま放置すれば極相に向けて変化を始める。変化にかかる時間は、現存植生の違いによつて異なる。三十ほど前、立田山の半分以上は草原であった。そのほとんどでは、次第に樹木が入り込んで、現在では照葉樹林やクヌギ・コナラ林に変化している。このまま行けばあと一〇〇年もしないうちに極相の森が広く覆つていることが予想される。



四、植生図から始まる自然環境の保全と創造 二十一世紀は環境の時代である。今後、

市民からの緑地保全や緑地創造の要求はさらには高まると予想される。しかし、要求に対す

る具体的な施策は闇雲であつてはならない。都市における緑地の創造や、土地利用計画、自然保護計画などは植物社会の質と広がりのよ

り詳細な把握のもとでなされなければならぬ。また、五〇年、一〇〇年先を見越した長期的な展望も必要である。そうでなければ、それらの行為は効果が上がりにくかつたり、無駄であつたり、場合によつては逆に自然破壊にもなりかねない。

その意味で、今回の植生図作成は現状の正しい理解という点で大きな意義があるのである。しかし、それはあくまで現状把握の一歩である。これをもとに次の一步をどう出すかこそ最も注目される点である。その一步は二十一世紀に向けてのメッセージであり、「森の都熊本」の将来を占う一歩でもある。

- | | |
|---|---|
| <p>1・16 第50回現代専門部会（通史編「現代II」の編集）</p> <p>1・17、20 近世史料調査（史料編「近世III」の校正）</p> <p>1・18 自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物原稿調整）</p> <p>1・19 第48回原始・古代専門部会（通史編「自然・原始・古代」の原稿内容方針）</p> <p>1・20 自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物原稿調整）</p> <p>1・21 第45回近世専門部会（史料編「近世III」の校正）</p> <p>1・22 近世史料調査（史料編「近世III」の校正）</p> <p>1・23 自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物原稿調整）</p> <p>1・24 第45回近世専門部会（史料編「近世III」の校正）</p> <p>1・25、26 近代出張調査（史料編「近世III」の校正）</p> <p>1・27、28 自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物原稿調整）</p> | <p>1・6、7、9、10 原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」執筆に伴う市内一円現地調査）</p> <p>1・10 中世史料調査（通史編「中世」執筆にかかる事例報告）</p> |
|---|---|

熊本市・岫雲院の木造如意輪觀音坐像と猪熊仏師について

熊本県立美術館

有木芳隆



木造如意輪觀音坐像

熊本市内春日三丁目に、^{いわが}巣をつらねている岫雲院（臨済宗）は、もと春日寺といい、『肥後國誌』によると菊池・正觀寺の末であつたと記されています。本院の本尊・木造如意輪觀音坐像は、像内の銘から天文十一年（一五四二）に造像されたことが知られていて、作柄もなかなかに堂々とした、市内でも貴重な在銘仏像の一つです。昭和四七年には熊本市指定文化財となり、『新熊本市史通史編第二巻中世』などにも大倉隆二氏による解説がつけられており、よく知られている像といえま

す。あらためて付け加えることもさほどないのですが、本像を製作した仏師の一派に関して、九州各県の最近の調査や研究であらたに解明されたこともあるので、簡単に述べてみたいと思います。

はじめに、本像の材質や形状をみます。像高は九六cmで、桧材をつかっています。眼に玉眼を入れ、構造は頭体部を一材から彫り出し、前後に割り矧いで内刳りし、頸部を割り首にします。膝部や両肩部および各腕先、髻部は別に造り、矧ぎつけています。像内の腹部と背部に、次のような銘文があります。

「為現世安穩」
肥後州飽田郡春日寺
本尊如意輪菩薩造立所
成就皆令滿足
右旨趣者護持且主藤原鑑貞
吏官左衛門尉員時同諸旦那元
武運長久子孫繁榮
天文十一年五月十七日住持仙舞（花押）
別而者寺門上下諸人快挙如意
志願衆 田尻勘解由入道宗德
同助三郎行寿 治部丞運貞（花押）
片岡宗左衛門尉 久右衛門尉

2 · 2	第39回中世専門部会（写真、図版など出稿と印刷工程）
2 · 2 · 5	近代出張調査（北海道立文書館ほか）
2 · 5	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）
2 · 11	第46回近世専門部会（史料編「近世Ⅲ」の校正）
2 · 12 · 14	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）
2 · 16	自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物図校正）
2 · 22 · 23	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）
2 · 23	第40回中世専門部会（担当執筆内容のレクチヤー）近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の分野別貢数・中間報告）
2 · 26	第49回原始・古代専門部会（通史編「自然・原始・古始・古代」原稿校正の基本方針）
2 · 27	第33回自然専門部会（通史編「自然・原始・古代」最終編集方針）
2 · 28 · 3 · 1	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）
3 · 3	原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」原稿の時代間調整）
3 · 4	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）
3 · 8	第47回近世専門部会（史料編「近世Ⅲ」の校正）
3 · 9	原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」原稿の時代間調整）
	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）

本尊として武運長久・子孫繁栄などを祈るため、つくられたということが明らかです。それでは、本像をつくった猪熊運貞とは、どのような系譜に載る仏師でしょうか。

この仏師の一門に注目して、はじめて論考を発表したのは八尋和泉氏で（「中世博多仏師の存在と作品」九州歴史資料館紀要二号）を一九七六年三月、十件以上の在銘仏像を紹介されています。それによると、現在認められるこの一門の最初の作例は、福岡・黒木町坊の薬師堂にまつられている文亀三年（一五〇三）銘薬師如来坐像で、「佛所大進法眼院徳・息与次郎、同小四郎、元松」などの銘文があつたのです。さらに、福岡市・誓願寺蔵の薬師如来坐像の修理銘に「永正十五年（一五二八）、佛所博多住、大進法眼息与次郎重元」とあり、再修理銘には「天文十二年（一五四三）、仏師□、猪熊小四郎」が記されています。このことから、八尋氏は、「大進法眼」と与次郎重元らが父子で造像をしていたことや、博多の仏所であり、そしてまた、この仏師一家が、「猪熊」姓であつたことも推察されるといわれています。

また、近年、楠井隆志氏は、以後の調査で発見された猪熊一門の作例をまとめました（「中世博多仏師猪熊の系譜」中世美術研究会発表一九九五年六月）、楠井氏によると、いまのところ二四点の仏像が確かめられており、地域的にも福岡や長崎県だけでなく佐賀県にもその作例が伝えられています。

なかでも、熊本・岫雲院の観音像をつくった猪熊運貞については、佐賀県・小城町円通寺藏の天文六年（一五三七）銘若訥宏辯像に「佛所猪能治工経運貞」と記されているなど、作例が三例（除、岫雲院像）ほどあることが報告されました。大進法眼との血縁は記されていないうですが、時期的にはその子ども世代です。

八尋氏や楠井氏の論考を踏まえて、九州のなかで岫雲院・如意輪觀音坐像を見てみれば、

本県でみつかつたはじめての猪熊一門の作例

であり、その活動範囲を検討するうえでも、

室町時代の肥後の造像活動を考えるためにも

まことに貴重なものといえるのです。

ところで、近年、県内の造像資料のなかで、

菊池郡合志町竹迫の日吉神社に「（前略）上

社者、後土御門院文明九年（一四七七）六月

日有天怪事汚乎社壇因茲改地洛人大進法眼

新造神像匠氏修理亮経當神殿」という興味

深い記録のあることがわかりました（『国郡

一統志』国郡名社志卷九拙稿「肥後造像資

料稿」）。合志町・竹迫の日吉神社で文明九年（一四七七）に「洛人大進法眼」が、新しく

「神像」を造像したことが述べられています。

これによると、「大進法眼」らは、博多より

が知られ、猪熊一門の九州とのつながりを考

えるなかで重要な史料といえます。

また、黒木町・坊の薬師堂の薬師如来坐像

3・10 第55回部会長会議（各部会の進捗状況、通史編の編集）

3・11 第41回中世専門部会（担当執筆内容報告）

3・14 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）

3・16 第56回近代専門部会（史料編「近代Ⅱ」候補史料の分野別報告）

3・17 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）

3・18 第51回現代専門部会（通史編「現代Ⅱ」の編集）

3・19 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）

3・20 自然史料調査（通史編「自然・原始・古代」植物の生園校正）

3・25 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の校正）

3・26 中世史料調査（通史編「中世」の執筆原稿チエック）

3・27、28 原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」の編集）

4・1、3、7 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）

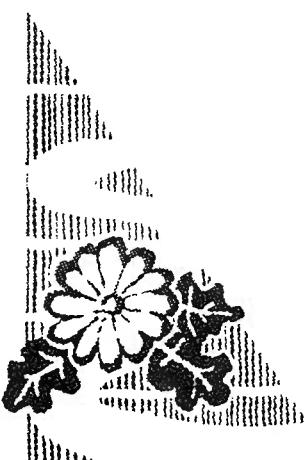
4・9 中世史料調査（通史編「中世」の編集、写真などの割付け）

4・10、11、13、14 近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）

4・16 原始・古代史料調査（通史編「自然・原始・古代」資料整理）

に「大進法眼院徳」と書かれているように、この一門と「院派仏師」(古代から中世に、都などで活躍した名前に院字の付く仏師集団)の系譜のつながりも、注目されています。院派の仏像は、十三世紀末ころから九州にももたらされました。十四世紀中期には、仏師自身が当地にやってきて造像をしていたようですが、それ以後のことなど、まだはつきりしません。時代的にへだたりますが、十四世紀までの当地の院派仏師と、大進法眼らは系譜につながるのか、国郡一統志の史料はこの点でも見逃せない意味をもつようで注目されるところです。

なお、本像の願主である鹿子木鑑貞は、名高い鹿子木寂心(～一五四九)の孫とされています。『肥後国誌』などには不行跡のため命を奪われたと述べられていますが、円徳寺(熊本市柿原、いまは寺跡のみ)を建立したり、本像を発願したりなど、大倉氏が指摘しているように、実は信仰心も深いものがあつたといえ、伝承には少し訂正が求められることでしょう。



史料調査に御協力いただいた方々

1998年（平成10年）1月～6月

四 宮 至	(世安町)	永福寺、往生院、岳林寺、吉祥寺、岫雲院	玉名市立歴史博物館、福岡市教育委員会
西 住 敬 事	(国府本町)	聖徳寺、莊嚴寺、大慈寺、徳正寺、法性寺	佐賀県小城町中央公民館、静嘉堂文庫
川 野 悅 子	(本山四丁目)	無漏寺、蓮台寺、廣福寺、西巖殿寺	広島県立歴史博物館
阿 蘇 惟 之	(一の宮町)	寂迦院、願行寺、英彦山神宮、高良大社	奈良県吉野町歴史資料館
野 口 令 史	(菊陽町)	櫛田神社、防府天満宮、正觀寺、常樂寺	奈良国立文化財研究所
宗 慎 治	(東京都)	泉涌寺、禪林寺、東妙寺、加来寺、普濟寺	宮内庁三の丸尚蔵館、宮内庁正倉院事務所
川尻神社、北岡神社、金峰山神社		満願寺、明言院、熊日情報開発局	東京大学史料編纂所、東京国立博物館
健軍神社、下郷神社、高平阿蘇神社		熊本県立図書館、熊本県立美術館	市文化課
日吉神社、藤崎八幡宮、宮寺神社、安国寺		熊本県文化課、八代市立博物館	敬称略

6 . 26	6 . 24	6 . 20	5 . 30	5 . 25	4 . 28
第22回新熊本市史編纂委員会（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）	近代史料調査（野口令史氏より軍事に関する聞き取り調査）	近代史料調査（史料編「現代Ⅱ」の編集）の分野別検討	第48回近世専門部会（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）	第52回現代専門部会（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）	第57回近代専門部会（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）
第6回新熊本市史発刊報告会			近世史料調査（通史編「近世Ⅰ」章立て）	第56回部長会議（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）	
			成年度事業計画（通史編「現代Ⅱ」の編集）	第56回部長会議（平成九年度事業報告、平成十年度事業計画）	近世史料調査（史料編「近世Ⅲ」の編集）



好評発売中
新刊案内

新熊本市史

全21巻

第6回
配本

新刊	通史編 第1巻 自然・原始・古代	颁布価格 5,000円
	通史編 第2巻 中世	颁布価格 4,300円
	史料編 第5巻 近世Ⅲ	颁布価格 4,800円
	通史編 第8巻 現代Ⅰ	颁布価格 4,300円
	史料編 第1巻 考古資料	颁布価格 5,700円
	史料編 第2巻 古代・中世	颁布価格 3,700円
	史料編 第3巻 近世Ⅰ	颁布価格 3,700円
既刊	史料編 第4巻 近世Ⅱ	颁布価格 4,800円
	史料編 第6巻 現代Ⅰ	颁布価格 4,800円
	史料編 第8巻 現代	颁布価格 3,700円
	史料編 第9巻 新聞上近代	颁布価格 3,700円
	史料編 第9巻 新聞下現代	颁布価格 3,700円
	別編 第1巻 絵図・地図	颁布価格 10,300円
	別編 第2巻 民俗・文化財	颁布価格 5,300円

通史編 第1巻 自然・原始・古代

- 市民の生活や歴史の舞台となった自然の地域性を多角的に浮き彫りにし、景観や環境問題にも及んで叙述。さらに植生図も添付
- 原始・古代は、市域の発掘調査など最新の考古学の成果を取り入れ、新説を交えて時代ごとに記述

通史編 第2巻 中世

- 平安中期(10世紀)ごろから佐々成政入国までの熊本の中世を多くの史(資)料を駆使し、新説も提示しながら豊富な内容で編集
- 政治・経済・宗教・芸術のみならず庶民の生活に多くふれた総合的中世史

史料編 第5巻 近世Ⅲ

- 近世期の藩庁の直下にある熊本市域農村の特質を描き出す史料253点を収録
- 郡と手永、村の機構と機能、農業と諸産業、村の生活と農業経営、年貢と負担、災害と飢餓の6章で構成

問い合わせ先

〒860-8601 熊本市手取本町1-1 〒860-0083

熊本市市史編纂課

☎(096)328-2038

申込み先

熊本市大窪1丁目7-47

熊本県書店商業組合

☎(096)344-3831

FAX(096)344-5420

▽ 今年も第三回「くまもとお城まつり」が十月十七日(土)から十一月三日(火)にかけて熊本城を中心にさまざまなイベントが繰り広げられました。

今回から市史編纂課は、「新熊本市史」に学ぶふるさと熊本の歴史をテーマに「平成時習館」の講座を担当いたしました。市史の執筆に携わっておられる先生方にお願いしますので、史実に基づいた市史研究の成果も踏まえてお話をいただきたいと思います。

▽ 新熊本市史編纂事業も編纂委員会委員をはじめ各専門部会専門員の御尽力のおかげで、今回配本の通史編「自然・原始・古代」、「中世」、史料編「近世Ⅲ」の三冊をくわえ十三巻十四冊の「新熊本市史」が出来上がりました。

いずれも熊本市の歴史と文化を正しく理解し、また見直す上で最適の書だと思います。ぜひこの「読書の秋」、お手元の一冊に加えていただきたいと思います。

▽ 次回の配本は、史料編の終巻になります「史料編第七巻近代Ⅱ」を予定しています。

近代専門部会の専門員の先生方には、現在、執筆・編集作業に昼夜を分かつぬ御努力をいた

だいております。ご期待下さい。

史料の提供にご協力を

皆さんの身近に「史料」がありましたら、ご提供をお願いします。

熊本市市史編纂課

〒860-8601 熊本市手取本町1-1
☎096-328-2038

編集後記